平和の祈り（チャペルメッセージ⑨）

主の手が短くて救えないのではない。主の耳が鈍くて聞こえないのでもない。むしろお前たちの悪が／神とお前たちとの間を隔て／お前たちの罪が神の御顔を隠させ／お前たちに耳を傾けられるのを妨げているのだ。……彼らの足は悪に走り／罪のない者の血を流そうと急ぐ。彼らの計画は災いの計画。破壊と崩壊がその道にある。彼らは平和の道を知らず／その歩む道には裁きがない。彼らは自分の道を曲げ／その道を歩む者はだれも平和を知らない。　（旧約聖書・イザヤ書 59 章 1-2, 7-8 節）

「平和」とは一体何でしょうか。そのように問われて、私たちがまず考えるのは戦争がない状態かもしれません。しかし話はそんな単純でもないようです。例えば、戦争に反対する人は当然「平和」を主張しますが、戦争に賛成する人も「平和」という言葉を好んで用います。実際、世の支配者たちは戦争を始める時には必ず「平和のための戦争だ」と宣言するわけですが、そのことからも明らかなように、「平和」という言葉は非常に曖昧です。そしてまた、戦争さえなければ平和なのかというとそうでもありません。たとえ戦争が起こらなくても、飢えや貧困、人権侵害、環境破壊等が起こっているなら、やはり平和とは言えないわけです。その意味でも、真の平和とは何かを見極めることが重要になってきます。

今回の聖書の箇所にも平和について述べられています。紀元前 6 世紀後半期、数十年に及ぶバビロンでの囚われの状態より解放され、王国再建という希望をもって帰郷したイスラエルの人々は、変わり果てた故郷を目の当たりにして大きな絶望を経験します。そしてそのような状況の中で、預言者イザヤはイスラエルの民に語りかけるのです。神が無力だからあなたたちを救えないのではなく、あなたたちの今の悲惨な状況はあなたたち自身が造り出したものであり、そのことにまず気づくべきだと。さらにこの預言者は「彼らは平和の道を知らない」と述べていますが、確かに私たち人間は平和の道を知りません。人類の誕生以来、今日に至るまで人間は愚かな争いを繰り返してきました。「平和のための戦争」と言ってみてもそれは綺麗ごとに過ぎず、結局のところ、あらゆる戦争は戦争の為の戦争でしかないことは人類の歴史が証明しています。しかし、それでも人間は戦争をやめようとしないのです。

それでは一体、どうすれば平和はもたらされるのでしょうか。ある思想家は、相争っている敵同士が相手に対する要求を自主的に放棄することによって、すなわち相手に対して一歩引くことによって平和は達成されると訴えています。確かにその通りかもしれません。しかしながら、生身の人間には譲歩することがとてつもなく難しいのです。

しかしそうだとすると、人間の力によって真の平和を達成することはやはり不可能なのでしょうか。しかし、大切なのはむしろ、そのことに気づくことなのかもしれません。確かに、私たちは自らの手で平和を造り出すことはできませんが、平和を造り出すために努力することはできます。そしてそのためにも私たち自身がまず平和を尊び、平和を切望する思いを持ち続けることが必要となるわけです。今日の世界は、コロナ禍の影響で多くの人が職を失い、世界各地で人権が侵害され、決して平和とは言えませんが、それぞれが平和を造り上げるための努力を始めていくことが求められているように思います。